



書道家 大石 宏さん (千頭)

宏さんは8歳の時、初めて筆を握った。きっかけは親の勧め。学校で、習字の授業が始まったからだ。それから35年。宏さんは今でも、毎日のように紙に向かい続けている。「やめようと思えば、いつでもやめられたんです。でも、きっかけがなくて」。宏さんは、教え子の作品を添削しながら話し始めた。

千頭にある大石宏さんの書道教室。自宅横の建物で、毎週水・金・土の3回、地域の子どもたちに書の楽しさを教えている。作品の一枚一枚に、丁寧に赤を入れる。時に冗談を交えながらアドバイスをする。そんな温かな指導が、子どもたちに人気だ。「先生、こつちに来て！」子どもたちからは、ひっきりなしに声が飛んでいる。

「今こそ、書道教室の先生なんて偉そうなことをしていますが、以前は趣味で書いていただけなんです。特に目標もなく、ただ好きだからという感じだね」。

転職は31歳の時に訪れた。「転職をしました。工場での労働から、一人で作業する金型工の仕事に変わったんです。生活のリズムも変化し、自分の時間ができました。そこで、ふと思ったんです。20数年も、ただダラダラと書が続けてきたけれど、今のままでいいのか？本当に自分は満足しているのか？自問自

わたしは今でも学びの途中 子どもたちと共に成長していきます



答したんですね。そして、これじゃだめだ、いっちょ本格的にやってみるか。書道の認定試験を受けることにしたんです。

宏さんが挑戦したのは、書道教授会の認定試験だ。7つの書体※すべてに合格しないと、認定をもらえない困難な試験だ。試験を受けると決めてからは、毎日が真剣勝負。自分の殻を破るため、ひたすら紙に向かった。書き続けた。しかし集中は長く続かない。試験への挑戦は、同時に自分への挑戦でもあった。

教授会認定の称号を得たのは、それから2年後の秋。宏さんは、33歳になっていた。

34歳になったある日、近所の人に頼まれて、子どもたちに書を教え始めた。最初の生徒は2人。自宅の八畳間が教室だった。

あれから、10年が過ぎた。

最近、書に向かう気持ちが変わりつつあるのを感じると宏さんは言う。「最初のころは、基本に忠実。型にはまった書が正しいと、かたくなに信じていました。今は、もつと柔軟に、『書は万人のもの』と考えられるようになってきました。人それぞれに作品への思いがあつて、個性もあります。人はそれを『味』と呼ぶ。この『味』が大切なんだと思えるようになってきました。ここまで来るのに10年かかりました。わたしが師事する先生の教えに、かなり影響さ

れてますけどね。」と言って笑った。先生に先生がいるんですか？と驚いて尋ねると、「そりゃいますよ。わたしも未だに学びの途中なんです。自分が進みを止めてしまったら、子どもたちも今以上に伸びなくなってしまう」と、宏さんの向上心は止まらない。

「書を極めるなんてことは一生無いでしょうけど、極めちゃったら、逆につまらないと思うんです。学ぶことが楽しいですから。子どもたちと一緒にね」と、ほほ笑んだ。宏さんは、新しい事にも意欲的に挑戦する。昨年の産業文化祭では、赤石太鼓の演奏に合わせて迫力ある書を披露。来場者から大きな拍手を浴びた。「以前から、音楽など他分野との融合をやってみたかったんですよ。緊張はしましたが、楽しめました。書は失敗でしたけど」と照れ笑い。とにかく楽しいことが好きという、宏さんらしい笑顔だ。



※7つの書体 草書、楷書、行書、臨書、細字、かな、子どもの手本



※二八 2尺(0,75m)×8尺(1,75m)の紙

1 昨年の産業文化祭。赤石太鼓と書のコラボレーションを披露し、観客を沸かせた
2 普段の教室の様子。宏さんの熱心な指導で、子どもたちの書もどんどんうまくなる
3 二八に筆を走らせる宏さん。中央に書かれた「永劫の断崖」は、西脇順三郎氏の詩からとった言葉だと言う
4 並んだ筆。紙によって使い分けられている。壁に掛けられたほかにも、多くの筆がある



4

最後の一文をゆつくりと書き終え、宏さんは、ふつと息を吐いた。黒と白のコントラストが美しい、一枚の作品が完成した。最後に書の魅力について尋ねてみた。「すべてにおいて一発勝負なところ。書き直しがきかない潔さがあります。また、今日は気分が乗らないなあという日に、ビックリするような良い作品が書けることもある。そんな不思議なところも魅力の一つかな。わたし自身、まだまだ修行中の身ですから」と満面の笑顔で語る宏さん。

厳しいまなざしの書道家は、いつの間にか、やさしい書道教室の先生の顔に戻っていた。